

新島襄と女性教育

－「新島襄先生の遺訓」を手がかりに－

坂本清音

まえがき

最初に、おことわりです。

本シンポジウムの大前提である「同志社大学設立の旨意」（以下、「旨意」と略す）には、同志社女学校に関しては1回名前が出てくるだけです。設立の旨意を世に出そうとした新島の頭にあったのは、（そして、新島畢生の目的は）日本にキリスト教主義に基づく私立大学を設立することでした。しかも、この時期にはすでに決して夢物語ではなく、現実一步一步、その目的に向かって進んでいる途上のことでした。だから当然、それ以外のことには、この旨意の中で触れられていません。

その上、日本政府の女子に対する教育制度の遅れは著しく、女子の中等教育制度を規定した「高等女学校令」の公布は1899（明治32）年だったので、1888（明治21）年のこの時点では、女子の中等教育制度すら規定されていず、それを飛ばして女子の大学など、新島の脳裏に浮かぶはずもないのです。

ただし、私が迂闊だったのですが、本シンポジウムでの私の役割は、新島襄と同志社の中の女学校の教育について語ることに受け止めていました。そういうことならお断りしていけない、という気持ちがある中にはいつもあります。同志社英学校の1年後から、連綿と続いている同志社の女子教育であるにもかかわらず、あまり評価されていない。同志社の女子教育部門の歴史、あるいは重要性について知られていないことが多すぎると、常日頃考えているからです。

女子部単独の年史

そのことは、例えば、同じ頃に始まった神戸女学院や梅花学園が創立百年を迎えた1975（昭和50）年前後には、単独で、分厚い百年史を出版されているのに対し、同志社女子部に関しては、創設百周年を記念して女子中高が『同志社女子部の百年』（1978年 資料集）を出版し、2000（平成12）年になって初めて、女子大学が単独の年史『同志社女子大学125年』を発行した、という事実からも明らかです。

理由の一つには、女子部に属するものが、その歴史の重要さに注目していなかったことがあるかもしれません。同志社とえば「同志社英学校から始まる同志社大学という巨象」が存在していて、その陰に隠れて目立たなかった、目立とうとしなかったということが考えられます。

実際問題、女学校は英学校に比べて、規模において、経営上の基盤において、問題にならないくらい貧弱な学校でした。明治時代を通して全学生が300名を超えることのない、規模の小さい女子教育の場でしかありませんでした。

英学校に比べて劣っていた、非常にわかりやすい一例を挙げますと、同志社大学のキャンパス内に現在重要文化財として存立する5つの建物（彰栄館1884、礼拝堂1886、有終館1887、ハリス理化学館1890、クラーク記念館1894：数字は竣工・開館年を表す）は、5棟とも1894（明治27）年にすでにありました。それに対して、女子部の校舎は、それから15年後の1909（明治42）年においても、木造の校舎が4棟だけ—そのうち2棟は、すでに20～30年前にウーマンズ・ボードの献金で建った木造校舎で、あとの2棟は、英学校で使わなくなった木造の第二寮と、元は借家として持っていた建物に増築して出来た、これも木造の家政館だけ—でした。全て古びて貧相な校舎で、英学校から見ると、経済面からお荷物的な学校でしかなかったことも、あるかもしれません。

しかし、そこで行なわれていたキリスト教教育は、決してお粗末なものではなく、生活を通して身についた、イエスの愛に基づく価値観、自立した女性の生き方でしたし、当時の女子教育のレベルから言って決して見劣りのするものではありませんでした。

「旨意」との関連

さて、話を本題に戻しますと、なるほど「旨意」の中で、新島は女子の大学について一言も語っていませんが、始めの方で、新島は同志社の創立以来の彼の教育思想、一言で言えば、教育は知育と徳育の併行主義でなければならず、しかもその徳育はキリスト教主義に基づいたもので、同志社のような私立学校でなければならないと繰り返し述べています。その点を考慮に入れるなら、女学校における教育についても触れていると言えます。

もう一つ旨意と関連付けるとすれば、今日の副題につけました日本基督教婦人矯風会書記、佐々城豊寿の「新島襄先生の遺訓」（以下「遺訓」と略す）です。「遺訓」が世に出たのは、1890（明治23）年2月1日のことで、「旨意」は、1888（明治21）年11月に全国の雑誌・新聞紙上に公表されたのですから、1年2ヶ月後のことになります。しかし、あとでご説明いたしますが、内容をよく読むと、この記事と新島の大学運動とは間接的につながりがあったことが分かりますし、その上、この中に書かれていることは、新島が終生かかって到達した究極の女性観、女子教育観であることが分かります。別の言い方をすれば、「遺訓」に書かれている新島の女性教育観は、「旨意」と同じ時期までに新島が確信していた女性教育観の集大成であると言えます。

新島襄と女学校との関わり

生存中の新島と女学校との関わりは、英学校に比べると、残念ながら、きわめて限定的と言わざるをえません。キリスト教主義の学校、同志社を京都に創設した時から、新島を取り巻く周囲の状況は彼に苦難と忍耐の生活を強いましたし、彼はまた終生病気持ちでしたから、実際の教育現場での活動には限度がありました。

しかしながら、新島校長のキリスト教信仰に基づく揺るぎない女子教育観、人々の生き方を種々の束縛から自由にしたいとの信念と実行は、同志社の女子教育部門の礎となりましたし、その後の日本社会の右傾化の中にあっても、ぶれることのない新島の信念は女学校のキリスト教主義の地盤を揺るぎないものにしました。また、新島が各地で行った講演は多くの女性に生き

る希望を与えました。そういう意味で、「遺訓」を手がかりとすれば、「旨意」からあまり離れたものにはならないだろうとの思いはありました。また、英学校で直接新島から学んだ教え子たちが女子教育の場で活躍し始めるのもこの時期からです。

高等教育機関としての同志社女学校の始まり

確かにこの時期、同志社女学校を高等教育機関と位置付けることは、制度上も不可能なことでありました。しかし1903（明治36）年に公布された専門学校令によって、ようやく日本の女性にも高等教育を受ける機関の開校が許可されたときに、女子専門学校としては6番目の1912（明治45）年に、同志社女学校に専門学部の設置が認可されたのは特筆すべきことでした。それは、カリキュラム上で着々と女子の高等教育の準備をしてきたことが大いに影響しています。

これは、「旨意」発表から四半世紀後のことになりますが、そのとき成就した女学校専門学部の設立と、その後、私学としては初めて女子学生の正規入学を認めた同志社大学への進学への道は、学園同志社の果たしたユニークな貢献であり誇るべきことであります（「旨意」の時期とはずれますが、女子の高等教育化という意味で、時間が許せば、少しだけでも触れておきたい項目です）。

「複眼の思想」から

もう一つ、同志社女学校の教育をご紹介するにあたり、日本側の資料とアメリカ側の資料の両面からアプローチしたいと考えています。これは、北垣宗治先生がご著書を通して、早くから主張されている「複眼の思想」の理論と関係するのですが、先生は同志社の教育を考える場合は、新島襄とアメリカン・ボードの両方の視点から見ていく必要がある、とおっしゃっています。その立脚点に立って、私も同志社の女子教育を①新島と新島の後継者たちと、②ウーマンズ・ボードの支援で派遣された女性宣教師たちの両方の視点から跡付けていきます。女学校の場合は、女子のキリスト教教育のためにアメリカから渡ってきた女性宣教師の役割は大変大きかったのです。

前置きが少し長くなりましたが、これから本題に入ります。すなわち、「旨意」の中で述べている新島の教育思想、知育と徳育の併行主義に関して、女子部の場合を検証していきます。その場合、時期を3つに分けて論を進めます。

- I 創設期前後
- II 「旨意」発行の頃
- III 新島最晩年の女性観、女子教育観

最後に同志社女学校の高等教育化の時期について、時間があれば触れたいと思います（当然、新島の没後になりますが、彼の間接の関与が花開いた時期と言えます。この時期に関しては、故宮澤正典先生を偲んで、生前のご研究をご紹介しますと思います）。

I 同志社女学校創設前後の「知育」と「徳育」

同志社女学校のスタートと新島襄

同志社創設に際して新島の役割がオールマイティであったとする見解から、もっと実像に近づけて新島の姿を見直そうとの流れが始まったのは、同志社人文研のプロジェクトとして、1989（平成元）年から4期16年続いたアメリカン・ボード宣教師文書研究会の成果が現れる2005（平成17）年頃からだと言えます。

伊藤彌彦編『新島襄全集を読む』（2002年）の中で、本井康博氏は『新島襄全集』10巻の完結を契機に、また研究者の世代交替に伴い、新島研究の主流が「顕彰」（功績を讃える）から、「検証」（資料に基づいて証明する）へと変貌を遂げつつあると指摘しています。

これを女学校創設に当てはめて考えますと、ある時期まで、新島夫妻（英学校は新島襄が、女学校は新島八重）が創立した、という図式的には極めて分かりやすい説がまかり通っていたのですが、宣教師文書の研究を通して、それが間違いであることが検証されました（しかし、2013年に放映された

NHKの大河ドラマ『八重の桜』のおかげで、この旧説が再び勢いを盛り返し、多くの人がある説を信奉して、新島八重同志社女学校校長説に戻っている傾向があります。せっかく「検証」して、その説をひっくり返してきた一研究者としては、甚だ遺憾なことと感じております。

女学校設立の牽引車となった3人

リアルタイムで史実を記録している宣教師文書を読んで明らかになったことは、1876（明治9）年、同志社女学校の創設に最も積極的だったのは、J. D. デイヴィス（Jerome Dean Davis）であり、その次が山本覺馬で、3番目为新島襄ということでした。この順に逆はありません。

考えてみてください。新島襄にとって、当時、京都は「内陸部」（外国人には居住権も財産権も与えられない）と位置付けられており、仏教徒や神官からの激しい抵抗勢力が大いに予測された地に、何はともあれ、キリスト教の男子の学校を立ち上げることに新島の全エネルギーが注がれたことは当然のことでした。同志社英学校をスタートさせる前に、女学校のことを考える余裕など新島にある筈もなかったし、10年に及ぶアメリカでの学園生活が全て男子校であり、そのような学校を日本に設立したいと1874年帰国前にラットランドの教会で訴えた新島にとって、この時点で、彼の「志」の中には、キリスト教の女子教育との関わりは存在しなかったと言っても間違いにはならないだろうと思います。

一方、デイヴィスは、1871（明治4）年、新島の帰国よりも3年早くから日本に住んでおり、神戸の宇治野村英語学校の校長を務めていました。その特別教室が女性と子どもを対象にしたクラスで、のちに神戸ホーム〔神戸女学院〕の設立に携わるダッドレー（Julia Elizabeth Dudley）とタルカット（Eliza Talcott）女性宣教師が教えていたのですが、その教室でのキリスト教による女子教育を通して、日本の女性が「革命的に」生き方を変える姿を目の当たりにしていました。すなわち、これまでの儒教の教えのもとで半人前扱いしかされてこなかった日本女性がキリスト教の価値観に根ざした教育を受けることにより、自らに備わっている力を信じ自分の足で立つ生き方を体得して、積極的に生き始める姿であります。それゆえに、明治日本を変える

ためには、女性による女性のためのキリスト教教育が肝要であると確信していました。

また、同志社が京都の地に立つことに大きな力となった山本覺馬も、英学校が出来る前から「1日も早く、京都にキリスト教の女学校が立つことが望ましい」と言っていると、デイヴィスはボード本部幹事のクラーク (N. G. Clark) に報告しています。(1875. 7. 10)

J. D. デイヴィスの実践

そういうわけで、デイヴィスは神戸での経験と確信をもとに、新島が男子のためのキリスト教主義の学校を建てるなら、それとペアの関係にある女学校が是非必要だと早くから設立の準備に取り掛かっていました。具体的には、神戸の場合と同様、キリスト教の女子教育を担うことのできるのはアメリカから派遣されてくる女性宣教師以外にはないと解っていましたので、デイヴィスは京都に今すぐ何人か派遣してほしいとボード本部に何度も手紙を書いておりました。それに応えて、最初の女性宣教師として派遣されてきたのがスタークウェザー (Alice Jannette Starkweather) であり、彼女は 1876 (明治9) 年3月に京都に着き、柳原前光邸を借家としていたデイヴィス一家の居候として住むことになりました (徳川時代の 250 年、キリスト教は禁教であり、キリスト教に近づくことはご法度だったのですから、当時、女学生にキリスト教の教育をすることができる日本人女性はいるはずもありません)。

そして約半年後の 10 月 24 日から「京都ホーム」という名前で、同志社女学校は私塾としてスタートするのです。

新島の出番

さて、始まりの順位としては新島は3番目ということをご理解いただけたいと思いますが、彼がいなければ、同志社女学校が正規の学校として世に出ることはできなかったのですから、新島が大変重要な人物であることに変わりはありません。

お配りしている資料¹⁾ (表1) にもありますように、「京都ホーム」開校の

1年後の、1877（明治10）年4月23日付で京都府知事に出された届出をご覧ください。新島によって出されたこの届出によって、同志社の女子教育は初めて京都府によって認められた学校としてスタートを切ることができました。

その時の校名は「同志社分校女紅場」となっていますが、半年後には勸業課からクレームがついて「同志社女学校」と校名を変えることになります。理由は、届け出られた「学科」が、女紅科目ではない（表Iの家塾願いの学科名参照）ということです。同志社女子部では、初めから主として普通科目（今でいう、リベラルアーツ）が教えられているのです。もちろん、その名称変更届も、新島校長が届け出ました。

つまり、新島襄の役割は正式に女学校と認められるに際して、彼なしにはできなかったということと、もう一つは京都は当時内陸部と位置付けられていましたので、宣教師たちも日本人である新島に雇われないと京都に住むことができなかったことがあります。

届け出られた女学校教師

もう一度届出を見てください。そこには女紅場に雇う教員履歴として、スタークウェゼルの名前と履歴が書かれています。届けられている正式教員はスタークウェザーだけだとわかります。

さらに、キリスト教の女子教育はホームスクールとして3人の女性宣教師のもとで、学科の勉強と生活訓練を受けて初めてできると考えられていましたので、すぐに京都の女学校のためにと2人の女性宣教師、パーミリー（Harriet Frances Parmelee）とウィルソン（Julia Wilson）が派遣されてきました。しかし、この2人を新島が教師として雇い入れしようと届出を出すと、今度は仏教徒の反対を恐れて知事の榎村正直が許可を出さないのです。

この問題を解決できるのは日本人である新島襄だけですから、ここから彼の苦労が始まります。その許可を得るために、何度も東京に出かけて代表者としての責任を果たすことになり、女学校校長としての新島の重要性がますます顕著になるのですが、今は、「旨意」との関連で、女学校のキリスト教教育の中身を吟味する必要がありますので、カリキュラム表を見ていくこと

にします。カリキュラム面に関しては、英学校の第1期卒業生である宮川経輝が主になって作りました。

待たれていた宮川経輝の女学校就任

宮川経輝は熊本英学校時代から女子教育に関心があり、同志社英学校の卒業論文も「女子教育」だったのですが、スタークウェザーが彼の女学校教員就任をどれほど待ち望んでいたかを吐露している書簡を紹介します。1879年の2通の手紙です。1通目は、ウーマンズ・ボードの支援者宛です。

もうすぐ神学校を卒業して女学校の教師になることの決まっている青年〔宮川経輝〕は、熊本で信仰に目覚めて以来、最初から、この国の女性の地位向上に深く関心を寄せていました。就任が決まるとすぐに東京の女子師範学校の校長宛に女学校を巡回したい旨の手紙を書きました。また、この夏、郷里に帰ったら、行ける限り全ての女学校を訪ねるつもりでいます (Starkweather to Friends 1879. 3. 18)

もう1通は、アメリカン・ボード幹事の N. G. クラーク宛です。

もうすぐ英学校を卒業する最も優秀な生徒の一人〔宮川経輝〕が、この9月から女学校専任の日本人教師となることが決まっています。彼はすでに仕事を始めており、どうしたら女学校を隆盛に導くことができるかに一生懸命です。彼の努力により『同志社女学校規則』も改善され、コース別の学科課程表²⁾ (表2) が整った形で記載されることになります。彼が示してくれる優れたクリスチャンの手本、これもまた、女学校には掛け替えのないものになりつつあります。

(Starkweather to N. G. Clark 1879. 5. 22)

聖書科目について

さて宮川経輝の努力のおかげで、表2にある通り、1880(明治13)年度からは『女学校規則』と明記され、女学校の広告だけでなく、規則・舎則・

学科課程（本邦科・英書科、それぞれの学年、各学期の履修科目）が作成されました（『同志社百年史』資料編 313-316 頁、以下『百年史』と略す）。この中の学科課程と、スタークウェザーが本国に送った報告書の両方を並べて見ることにします。

『百年史』（表 2-1）の方を先に見ますと、科目名に聖書とか修身という科目が見当たりません。新島は同志社創立時に学内では聖書は教えないと槇村京都府知事に約束をしていましたし、その条件は女学校に対しても同じでした。そして当時は、それを確かめるために府の視察官が突然学校に来ていた時代でしたから、書くわけにはいかなかったのでしょうか。

その代わり、英書科と予備科 1 年を除いて、各学年、各学期の最後に「作文講義」という科目があるのに注目してください。この「講義」が曲者で、作文の講義をするのではもちろんありません。これは当時、市中で行われていた説教所を「講義所」と呼ぶのが一般的であり、英学校生が講義所の活動をするのを女学校生が手伝いに行くことは、宣教師文書の中でよく報告されています。そこで、女生徒は教会学校の生徒を教えていましたので、「講義」の時間に、教会学校の教案作りとか、教材の準備などをしたのではないのでしょうか。

では、次にスタークウェザーが本国に送った 1 週間の時間割（表 2-2）を見てください。同じく 1880 年度のものですが、1 日の時間割風に見てあるので、毎日の生活時間がよくわかります。英語・日本語のどちらを見てくださいでもいいのですが、朝一番にスタークウェザーによる Gospels 福音書の勉強があり、そのあと午前中は学科の勉強です。英語・地理・算数・日本史・理科などです。そして、12:00-12:10 にある Singing の時間は、讃美歌の練習でしょう。

昼食後の 1 時から 2 時半は宮川経輝による日本語の作文と世界史、2 時半から 3 時半までは、同じく宮川による日本語の聖書の勉強があります。月・金が Revelations ヨハネ黙示録で、火・木が Epistles 信徒への手紙を勉強しています。そして週に 2 日、3 時半から 4 時まで、火曜は 1 年次生のために、金曜は 2 年次生のために、新島校長が女学校に来て奨励をしていることが分かります。今でいう「チャペル」の時間です。

最後に、問題の「講義作文」が水曜の放課後に出てきます。下から2行目をご覧ください。英語では、General Exercise or Kogi Composition となっています。General Exercise は体育全般だと思いますが、次の Kogi が Lecture とかに訳されないで、Kogi のまま出ていることに注目したいと思います。宣教師の間でも、kogi は講義所の意味で使われており、講義所での教材の作文を作成していたのでしょうか。課外活動的ですが、キリスト教に関連する訓練が行われていたことを跡付けることができます。これなども、宣教師の側の資料を並べること、複眼の視点で見ることにより、表の読みに深みが出てくると言えましょう。

しかも、こちらは日本の役所の検閲を受けるわけではありませんから、自由に女学校で実施されていた時間割の中の、聖書の勉強が具体的に書かれています。キリスト教教育がしっかり実施されていたことがご想像いただけると思います。

なお、以前に同時期の英学校のカリキュラムと女学校のカリキュラム表を比べてみたことがあります。科目名や使われている教科書名に多くの共通点があったことが記憶に残っています。先ほど、宮川は各地の女学校を見て回ろうとしているとスタークウェザーが伝えていることを紹介しましたが、案外、同志社の場合、英学校の学科課程表を参考にして、女学校のカリキュラムも作っていたことが考えられます。そのおかげで女学校としては1880(明治13)年という早い時期に、とても進んだ学科課程表を備えていたと言えるのです。

II 「旨意」公表の頃の女学校での知徳併行教育

では今から「旨意」公表の頃の女学校での「知育」と「徳育」に移りますが、科目表を先に見ておきます。年代は、「旨意」に合せて、ちょうど1888(明治21)年のものがありました³⁾(表3)。

1888年の科目表

左が『百年史』(資料編328-333頁)に掲載されていたもの、右がハワイ

ト (Florence White) 「校長」⁴⁾の N. G. クラーク宛書簡 (White to N. G. Clark, 1890. 3. 31) の中に書かれていたものです。ホワイト宣教師は同志社女学校 4 代目の「校長」で、1888 年から 91 年まで 3 年間、任に就いていました。生まれはアーモストで公立校で学び、アメリカの女子教育機関で長年教師の経験を積んだ後、来日前の 2~3 年間は Mills Female Seminary で教えていました。

さて課程表に目を移しますと、どちらも欄外に但し書きがあり、『百年史』の方は「全科ヲ通シテ新旧両約聖書ヲ研究セシム」、ホワイトの方 (坂本訳) では、本科 (regular course) には、**新旧約聖書研究 週 2 時間、4 年間**と記されています。

さらに当時キリスト教女学校の間では、中等レベルの教育の上に、「高等科」とか「専門科」と名前をつけて、さらに進んで勉強を続けたい生徒のためのコースを設けていたのですが、同志社女学校でも「高等科」を設置していました。これは後で、女学校の高等教育のところでも触れます。

女学校の「徳育」

次に、ホワイト書簡と『つばみ』の両方から、女子部の特徴である「生活を通してのキリスト教教育」の実態を見てみます。まず 1888 年の同志社女学校における日常の宗教プログラムです。ホワイト「校長」がクラーク夫人に宛てた書簡 (White to Mrs. Clark 1888. 10. 24) の中で報告しているものです。

日曜 聖日礼拝

月曜 英語礼拝 (4 年生)

火曜 英語礼拝 (2、3 年生)

(月・火) とともに、場所はホワイト「校長」の部屋

金曜 同志社公会堂で日本語礼拝

土曜 ホワイト「校長」による通訳付き英語礼拝

毎日 全寮祈祷会は 18:30~(賛美礼拝の後、祈祷)
20:00~20:15 (各部屋で全員参加の祈祷会)

とあります。

この表に続けて、ホワイト「校長」はこのような日常生活とは別に、地方伝道の仕事、災害時の緊急支援のための募金活動も大切な宗教教育であると書いています。具体的には卒業生の教師たちが夏休みを利用して伝道旅行に出かける際に、その資金を調達するために生徒は（女生徒のみならず、教会学校の生徒も）献金をする、教師は伝道の成果を学校に持ち帰って生徒に伝え、次には上級生も一緒に伝道に出かける、そのための特別な聖書の勉強会を持つといった活動を通して、学校内のキリスト教的雰囲気徐徐に高めていきました。

その結果 1888（明治 21）年は女生徒 30 人が受洗し、上級 2 学年の全員がクリスチャンになったのですが、ホワイト「校長」にとって何より嬉しかったのは、この成果が特別な宗教的リバイバルのせいではなく、日常生活の中でキリスト教的感化を体験させた結果であったことだとヒル夫人（White to Mrs. Hill, 1889. 11. 25）に書き送っています。校内の日常生活を通しての地道なキリスト教教育が功を奏している様子を本国に報告しているのです。

次に『つぼみ』1890 年 4 月号誌上に同志社女学校生によって紹介された同志社女学校の日常生活⁵⁾（表 4-2）をご覧ください。ホワイト「校長」の時代とあまり変わらないのですが、もう少し詳しく記述されており、特に日曜日のいくつもの教会行事の詳細が分かりますし、土曜にはボランティアの時間もあります。女学校生徒はまさにキリスト教漬けの毎日でした。

『つぼみ』について

ここで少し『つぼみ』についてご説明いたします。『つぼみ』は「遺訓」が出たのと同じ時期、1890（明治 23）年 1 月から 92（明治 25）年 4 月まで満 2 年間、関西に位置するキリスト教女学校の間で発行された機関誌です。1889（明治 22）年の日本国憲法、そして翌 90 年の教育勅語発布をきっかけにキリスト教の女子教育に対して社会的逆風が吹き始めた結果、各地のキリスト教女学校の中にはキリスト教主義教育を標榜することをやめる学校が続出しました。その流れに逆らって、関西のキリスト教女学校が連帯して「女文会」を組織し、キリスト教主義の学校の存在理由を明らかにしようとする

動きから始まった機関誌です。

最初の加盟校は同志社と梅花と神戸英和女学校と山陽英和女学校の4校(表4-1)でしたが、最終的には計10校⁶⁾まで増えました。発行の主旨は「姉妹校の修好」「文学の奨励」「女学の開進」の3つでした。すなわち、これまでは、同じキリスト教主義の学校でありながら、あまり繋がりを深めてこなかったが、これを機会に大いに交流し、各校の女学生たちに文学を奨励し、キリスト教女子教育について意見を交わし合い問題点を研究しつつさらなる発展を図りたい、というのが趣旨でした。

私は以前に、この『つぼみ』を調べていた時期があったのですが、その折に強く心に残ったことは、3番目の目的「女学の開進」すなわち、キリスト教女子教育の基礎固めと更なる発展を願って誌上で交わされた議論でした。

① 「女学の開進」の中の「我ら」

この組織「女文会」の中心会員は同盟校の生徒たちなのですが、特別会員として加盟校の教師・社員・卒業生も入っており、その連帯の力が大変強いのです。そして、投稿される文中によく出てくる「我ら」という呼びかけには、独特の暖かさと信頼感が溢れています。「我ら」はいつも女子教育者のみに向けられているのではなく、多くの場合その対象に女生徒を含み、しかも彼女たちに対して決して上から目線で呼びかけているわけではありません。喜びも悲しみも共に担う共労者としてのアピールが、その響きの中に感じられ、生徒たちが一人の人格として遇されていることがひしひしと伝わって来ます。だからこそ、女生徒の側でも、この呼びかけを本気で受け止めきちんと答えていこうとしているのです。当時の女子教育者たちが、年齢、経験の差を超えて、教師も生徒も同志として、この世の戦いを勝ち抜こうとの力が溢れていることが大変印象的でした⁷⁾。

② 女学校のカリキュラムの高等化

次は、『つぼみ』誌上に載った女学校の高等教育化と関連する記事です。女文会の加盟校は年に1回大会を開き近隣の学校が集まって、各学校から提案される議題を話し合うことを行っていました。1890(明治23)年の夏休

みに開かれた第1回大会で、「旨意」の主旨である私立大学設立と関わりのある「女学のレベル」の議題が取り上げられています。もちろん、この時点では制度上はまだない「女子専門学校」の設置についてです。

理由は、今や女子教育は十数年の歴史を有するに至り、いわゆる普通の学識芸能を養う女学校はかなり普及してきたこと、それゆえ目下の急務は、さらに高い教育を受けて、それらの女学校の教員となるべき人を育てることであると主張です。そして具体的に、アメリカン・ボードと関連する京都・大阪・神戸の3女学校間で教育のレベルを中等教育からカレッジレベルに上げることが話題となりました。しかし1クラス数人という少人数で、それぞれの学校にこのようなコースを設けるのは経済的に無理なので、京阪神なら経済的に最も恵まれた神戸女学院だけに設けたらいいという議論が、日本ミッションで行われていたことを紹介しています⁸⁾。

1888(明治21)年に新島が「旨意」を公表して男子の私立大学設立を訴えていたことが、女子にも高等教育をとという風潮に波及したとしたら、女子高等教育必要論のフロンティアとして、新島の果たした役割は大きかったと言えるのではないのでしょうか。

Ⅲ 新島最晩年の女性観、女子教育観

さて、ここで、新島が生涯かかって到達した畢生の女性観、女子教育観をみておきたいと思います。「はじめに」で申しました通り、「遺訓」が世に出たのは「旨意」が公表された1年2ヶ月後のことですが、両方とも、新島の人生の最後の日々まつわる出来事としてみると、なかなか意味深いものがあります。

それが最もよくあらわれているのが、『女学雑誌』198号(1890年2月)に掲載された佐々城豊寿の「新島襄先生の遺訓」と言えます。

この文章の冒頭で、「わが国宗教家の泰斗、修身科私立大学の率先者」と紹介されている新島先生が去る1月23日に逝去されたことを深く惜しむと弔意を述べた後で、新島先生が帰国されて東京や横浜で話されるのを聞いた時から皆が日本国民の父のように慕っていたのだが、先生はすぐに京都に移

られてがっかりした。ところが、近年大学設立運動を起こされたこと知り、同志の姉妹と支援の音楽会を開きわずかだけでも献金を捧げたこと、それに対し早速お礼の手紙が届いた。それだけでも恐縮していたのに、昨年12月23日に鍛冶町の茂林館でお目にかかることができたことと記されています。また2日置いて、今度は矯風会の会頭潮田知世子同伴でもう一度会っています。

そして、その時伺ったことを遺訓と捉えて豊寿は『女学雑誌』に寄稿しました。新島と佐々城との直接の出会い、生涯で、これが初めてでした。そして、初めて会った女性に新島がこれほど重要な言葉を遺し、忘れないうちにと彼女が文章に残しました。この全ての出来事は、神のご計画であったと解することが一番納得のできる答えです。なんとも不思議な神のおはからいです。

「新島先生の遺訓」のポイント

「新島先生の遺訓」中で、特に注目していただきたい文言を取り上げます。

今日茲に面会したるを幸いに貴姉に頼みたき事業あり、そは外の事ならず女権を拡張することにもう一層の力を尽くされたし
まず女学校生徒に人権を重んずべき事と慷慨心を起さしめるの一事是なり

御身達、決して失望することなく倦むことなく憚ることなく断然世の革命者と成られよ 否世の改良者と成りて働かれたし

今から130年近く前に、新島は「女権」という言葉を使って女性の権利が正当に守られ、女性が一人前の人間として扱われることを強く願っています。新島は自らが脱国前に感じていた閉塞感・不自由さを思い起こし、それが留学中に体得したキリスト教の信仰によって払拭され自由にされた喜びの体験を、日本女性にもぜひ味わってほしいと願うようになったのです。

しかも、「今貴姉（とよ寿）に如斯事業を托するは愛姉の生命を縮むる様

のものにて私情に於ては忍びざる事ながら御互に私の為めにあらず皆神の下僕たる義務を遂るに過ぎざれば決して人の誇りにより撓むことなく変ずることなき様にせられよ」と訴えています。新島にとって、すべての志（事業）は自分のためではなく、神の僕^{しもべ}としての義務を遂行するためだったのであり、だからこそ接する人の心を強く動かすことができたのでした。

それ故、この遺訓は新島襄が信頼し尊敬する女性に託した、女性に対する人生最後のメッセージと位置付けることが出来るでしょう。図らずも、大学設立運動が新島の人生の最後の取り組みであったのと同様、この豊寿に当たった訓戒が新島最後の女性に対する願いになったことを思う時、旨意と遺訓との共通点を見出す事ができてよかったですと考えています。

また「旨意」が蘇峰の筆になることにより、大変格調の高い文章に仕上がっていることはよく言われることですが、この「遺訓」も、長年基督教婦人矯風会の書記を務めていた豊寿の筆により、大変リズムカルで格調が高く、記憶に留めやすい言葉となっています。話しているうちに、新島の心情が高ぶり慷慨心が湧き上がっていくのを聞いているうちに、豊寿が新島と一体化している感すらあります。新島の生^{なま}の言葉がちりばめられた文章と言えます。

新島が女学校のために割くことのできた時間には限りがありました。しかし、広く日本中に向かってキリスト教女性教育のオピニオン・リーダーとして遺してくれた言葉の持つ意味は、限りなく深く広く大きいのです。現代の日本に置き換えても十分に通用します。現代の私たちが、創立者のこの言葉、この志に戻ることができさえすれば、同志社の女子教育は安泰と言えます。

ご清聴ありがとうございました。

(なお、女子の高等教育化については、シンポジウム総合討論の中で触れていますのでご参照下さい)

表 2-2 女学校 1 日の時間割 (1880 年度)

1880

Daily Program
of
Koto Gaku School.

A. M.

8-9 Gospels. Starkweather.
Mr. Guffey's 5th Reader. Stackhouse.
Mrs. Guffey's daily recit Mon. Miyagawa.

9-10 Mr. Guffey's 3rd Reader. Stackhouse.
Nat. Philosophy (Jap. in's) Kato.
1st Reader a 6th new Parnellee.

10-11 Geog. of Japan. Miyagawa.
2nd Auth. (Jap.) Kato.
2nd Japanese History. Senchida Oima.

11-12 Physiology. Tues. Thurs. Fri. Jap. Kato.
1st Auth. Mon. Wed.

11-11 $\frac{1}{2}$ Eng. History. Tues. Thurs. } Starkweather
11 $\frac{1}{2}$ -12 5th Reader. daily. }

12-12.10 Singing. " "

P. M.

1-1.45 Japanese Writing. Miyagawa.
Chinese Auth.

1.45-2 $\frac{1}{2}$ Gold's Best. (Sentiment) Jap. "

2 $\frac{1}{2}$ -3 $\frac{1}{2}$ Mon. Hist. 1st Evolution. " "
Lucy. Thurs. Epistles.

1.45-4 Singing. 1st Class. Tues. Thurs. Kishida.
2nd " Mon. Fri.

Saturday

3 $\frac{1}{2}$ -4 Story. 1st Class. Tues. } Neeima.
2nd " Fri. }

Instruction of Organ. Starkweather.
Gymnastics. Parnellee.
The conductance of visitors cordially solicited.

(Ad. General Exercise on Kogi. Competitions.
Parnellee. Miyagawa. Starkweather.

1880年度時間割

《午前》

8-9時 福音書研究 スタークウェザー
モッコフ第5読本
英文和訳附録以外毎日 宮川

9-10時 モッコフ第3読本 スタークウェザー
自然科学 (日本語) 加藤
第1または第2読本 パーミラー
日本地理 宮川

10-11時 算数II (日本語) 加藤
日本史II 土田常子

11-12時 人身解剖 (火・木・金) 加藤
算数I (月・水) (日本語)

11-11時半 英作文 (火・木) スタークウェザー

11時半-12 第5読本 (毎日) スタークウェザー

12-12時10分 歌壇練習

《午後》

1時- 日本語作文 宮川
1時45分 中国史

1時45分- 万国史 (スウィント) 宮川
2時半 (日本語)

2時半- 黙示録 (月・金) 宮川
3時半 使徒書翰 (火・木) (日本語)

1時45分- 組織 1年次 (火・木) 岸岡弘
2年次 (月・金)

3時半- 奨励 1年次 (火) 新島
4時 2年次 (金)

オルガンレッスン スタークウェザー

体操 パーミラー

《本欄》 体育: Kagi-作文
パーミラー-宮川-
スタークウェザー

1880 年度「京都の女学校報告」(A. J. Starkweather) より

3) 表3 1888年の時間割

課程表 (1888年度) 『同志社百年史』資料編1
331-332頁

	第壹期	第貳期	第三期
第壹年	第一リーク	第二リーク	全左
	新撰読本 三上	全左 三下	小学新撰地誌
	筆算 分数	全左 小数	全左 小数
	約数		
	小学万国地誌	和文読本 一 二	全左 三
	会話	全左	全左
第貳年	作文	全左	全左
	習字	全左	全左
	第三リーク	全左	第四リーク
	和文読本 四	新撰読本 四	万国史略
	国史要要	全左	全左
	筆算 比例	全左 百分算 開方自乗	全左 級数 求積
	会話	全左	全左
	作文	全左	全左
習字	全左	全左	

各年級トモ数縫唱歌体操等ヲ授ク

【本科】

	第壹期	第貳期	第三期
第壹年	英語本 (第四)	英文構梯	全左
	日本外史	全左	全左
	筆算 (代数)	全左	全左
	英文書取	全左	全左
	作文	全左	全左
	英和習字	全左	全左
第貳年	会話	全左	全左
	和洋裁縫 体操 音楽		
	地理学 (英書)	全左	全左
	米國史 (英書)	英國史	全左
	十八史略	全左	元明史略
	幾何学	地文学	地文学
	英和作文	全左	全左
	習字	全左	全左
第三年	会話	全左	全左
	和洋裁縫 体操 音楽		
	万国史 (英書)	全左	全左
	植物学 (英書)	生理学	動物学 (英書)
	史記十伝	東葉博義	全左
	英和作文	全左	全左
第四年	会話	全左	全左
	西洋裁縫 体操 音楽		
	物理学 (英書)	全左	化学
	修辭学 (英書)	全左	天文学
	正文章軌範	全左	總文章軌範
	英和作文	全左	全左

【高等科】

	第壹期	第貳期	第三期
第壹年	英文学	全左	全左
	美術歴史	地質学	経済学
	唐宋八家文	全左	全左
	作文	全左	全左
第貳年	西洋裁縫 刺烹 音楽		
	英文学	全左	全左
	心理学	道義学	全左
	唐宋八家文	自然神学	文明史
	作文	全左	全左
	西洋裁縫 刺烹 音楽		
第三年	英文学	基督教証拠論	全左
	文明史	教育学	全左
	教会略史	全左	全左
	作文	全左	全左
西洋裁縫 刺烹 音楽			

全科ヲ通シテ新田岡約聖書ヲ研究セシム

ホワイト「校長」の課程表 (坂本訳)

【予備科】 Preparatory Course

<補足説明>	日本語
	中国史
	算術
	代数
	英語 (第4読本)
	聖書週2時間、SSの聖書研究 予備科の間に、かなりの量の英語の勉強をする

【本科】 Regular Course

	新旧約聖書研究 週2時間、4年間
第壹年	米國史 (英語)
	地理学 (英語)
	代数 (日本語)
	中国史 (上級)
	英國史 (英語)
	幾何 (日本語)
<補足説明>	英文法・英作文・英会話
	年間を通じて、生理学と動物学の中から、よく知られた主題を選んで会話をする
第貳年	万国史 (英語)
	生理学書 (英語)
	日本史 (上級)
	植物学 (英語1期)
第三年	中国史
	英文法復習
	英和作文と決まった主題に関する会話
	物理学 (英語2期)
	天文学 (英語)
	修辭学 (英語2期)
第四年	文明史 (2期)
	中国文学 (3期)
	英和作文 (3期)
	化学実験 (同志社英学校下村教授の授業 参加1期)
	心理学 (2期)
	自然神学 (1期)
【高等科】 Post Graduate Course	動物学と地質学 (各1期)
	キリスト教証拠論 (2期)
	英文学 (2期)
	中国文学 (2期)

【高等科】 Post Graduate Course

教育学
英文学と英作文
教会史
美術史

- 4) 「校長」に括弧をつけているのは、宣教師文書の中では、同志社女学校に派遣された宣教師の責任者には‘principal’が使っているから。その訳語として校長を使うが、同志社の場合、職務上の校長は新島襄なので、宣教師には括弧をつけている。
- 5)

表 4-1 『つぼみ』1号の表紙 表 4-2 『つぼみ』に紹介された同志社女学校時間割



日曜日	午前9時～10時 午後1時半～ 午後6時～7時 午後7時～8時 午後8時～8時半	同志社教会聖日礼拝 校内で安息日学校 讃美歌練習 上級生のみ英語の聖書研究会 祈祷会
月曜日～金曜日	午前7時半～8時 午前9時～午後4時 午後4時～午後5時 午後6時半～7時	祈祷と感話(現在のチャペル・アワー) 授業 運動遊歩 祈祷会
金曜日	午後6時～7時	同志社礼拝堂での教会祈祷会
土曜日	午後2時～4時	有志参加のボランティアの集い「真徳会」 (毛糸編物・手芸品を作成、慈善事業への基金とする)

- 6) 上記4校の他に、鳥取英和、松山、清流、一致、熊本、神戸松蔭（入会順）の6校で、計10校。
- 7) 拙著「『つぼみ』に見る女子教育の理念と成果－我等茲に感ずる所有り－」『総合文化研究所紀要』4巻 111-115頁、1987年
- 8) 拙著「『つぼみ』と同志社女学校－関西におけるキリスト教女学校の連帯－」『総合文化研究所紀要』15巻 125-143頁、1998年